

「イスラエル建国史」

15 第2アリヤの時代の 総括

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

独立62周年の風景

2010年のイスラエル独立62周年は、ヘルツェルの生誕（1860年5月2日）150周年と重なり、世界シオニスト機構（WZO）の主催で、ヘルツェルとシオニズム運動のゆかりの地で、1週間の記念行事が行われた（シオニスト機構は世界のユダヤ人社

会に参加を呼びかけ、シオニスト指導者120名とのツアーを組んだ）。

初日の4月14日はパリ。反ユダヤの空気に触れたヘルツェルが、民族の再興とユダヤ人国家の再建運動を決意した地である。「ユダヤ人問題—過去と現在」をメインテーマに、ユダヤ機関理事長のナタン・シュランスキー夫妻を招いた行事であった。ロシア出身のシュランスキーは、ソ連時代イスラエルへの移住決意が反ソ活動と見なされ、投獄された体験の持ち主である。

当日のハイライトが、パリ・オペラ座のギャラコンサート。4月13日から15日までフランスを公式訪問中のシモン・ペレス大統領を主賓に、フランスの政財界要人や文化人も招かれ、盛大な生誕祭となった。また建国記念の一環として、パリ市が、パリ第7区のセーヌ



シュランスキー



ヘルツェルの丘

河畔に近い通りを、ベングリオン通りと命名し、ペレス大統領の臨席で命令式が挙行された。

2日目の4月15日が、第1回シオニスト कांग्रेस会場（通称バーゼルカジノ）訪問であった。3日目の4月16日は、ヘルツェルが生活の場としたウィーンで、行きつけのカフェ・グリエンシュタイドルなどの訪問が行われた。4日目の4月17日（金）は、ヘルツェルの生誕地ブダペスト（本人はペスト側で生まれている）。イスラエルのディアスポラ担当相ユーリ・エーデルシュタインが出席して、ドハティシナゴークで記念行事が行われた。安息日を聖別するキドゥッシュの祈りとともに、ヘルツェルの遺徳をしのび受難者を追悼する行事が催されている。最後の3日間はエルサレムで、独立記念日と重なる形

をとり、ハイライトの4月19日には、ヘルツェルの丘で盛大な式典が挙行された。ちなみにイスラエルは2004年にヘルツェルの誕生日をヘルツェルデーとして制定し、主に学校と軍隊で、記念行事が行われている。



ペレス大統領

シオニズム推進派と反対派の対立

第2アリヤの時代を総括すれば、ユダヤ人社会の中でシオニズムの実践推進派とこれを阻止しようとする反対勢力がせめぎあった時期と言える。

ヘルツェルは、シオニスト कांग्रेसの創立記念をミュンヘンで開催しようとして、ドイツ・ラビ全体会議の猛反対を受け、開催地をスイスのバーゼルに変えた（第8回記事参照）。人智によるユダヤ

国家の再建はメシア信仰に反するというのが、反対理由であった。そのラビたちは、反シオニズムの立場を鮮明にして、その組織化を開始する。

きっかけが第10回 कांग्रेस（1911年8月9～15日）である。この कांग्रेसは、ウシシュキンらが提唱した統合シオニズムが勝利した大会で、エレットイスラエルにおける土地の購入と開拓の本格的推進が決まった。大会は、「ユダヤ人問題は、パレスチナへの移住によってしか解決できない」と決議した。さらに कांग्रेसはヘブライ文化の振興を決議し、ウシシュキンが司会する會議は初めてヘブライ語で行われた。

危機感をつのらせたのが、正統派のラビたちである。そしてその推



パリ・オペラ座

進役となったのが、サムソン・ラファエル・ヒルシュ（1808～1888）を中心とする新正統派のラビたちであった。

ヒルシュ師は、モラビアの主席ラビ（1846年）を務めた後、1851年からフランクフルト（アムマイン）の分離派正統シナゴグのラビになった人物である。分離の意味は、従来の正統派と違うという意味で、使用言語、衣服、教育等すべての改革に反対する伝統的な東欧系正統派と違って、現代の衣服を着用し、土地固有の言語を使い、一般教育を受け入れながら、信仰は崩さず伝統的生活を守る。世俗文化と一体の信仰（Torah im Derekh Eretz）がベースであった。

信仰上は、メシアが出現するまでユダヤ人は口承律法と成文法の戒律を守る信徒集団であり、独自の国を持つ民ではないとし、トーラに対する忠誠で、居住する国家と政治組織を持つ社会（ポリティカルコミュニティ）への帰属が妨げられることはない、と主張した。これがヒルシュ師の思想であった。ドイツ・ラビ全体会議は、シオニスト kongress 開催に反対した時、国家再建運動が、純粋な宗教共同体としての国家帰属と国家への統合に異議を唱えることになるとしたが、ヒルシュ師も同じである。

このような見解は世俗派の中にも見られた。例えば他者に対し比較的寛容な民主的社会がそうである。バルフォア宣言が出る前、イギリスの戦時内閣でただ一人のユダヤ人閣僚であったエドウィン・サムエル・モンタギュ（1879～1922）は、弾薬生産相（1916）、インド担当国務相（1917～22）等の要職を歴任した人物であるが、バルフォア宣言を出すかどうかの内閣討議で、反対したのである。ユダヤ人



ヒルシュ

というが、単に宗教上のことであり、ユダヤ教徒にすぎない。その教徒をパレスチナを民族の郷土とする国家の成員として認めることは、イギリス国民としての政治的アイデンティティに異議を唱えることである、とモンタギュは主張した。

シオニズム運動に反対する正統派の人々は、1912年カトヴィツェに集まり、アグダット・イスラエル（イスラエル連合の意）を作った。会議参加者は合計で300名。ドイツ、ポーランド、リトアニア、ハンガリー、ウクライナからの参加であったが、世俗に厳しいリトアニアのラビとドイツの新正統派ラビとの違いがあるように、解釈に違いがあり、意思の疎通に欠ける場合があった。シオニズムに反対するアグダット・イスラエルは、この後に来る第1次、第2次世界大戦時に大きい試練に直面する。

社会主義シオニズム

第2アリヤが終わる第1次世界大戦勃発まで、確かにアメリカへ移住するユダヤ人が圧倒的に多かった。エレッツイスラエルでの生活は苦しく、厳しい気候風土に加えて、トルコ帝国の支配下にあつて政治的環境も重苦しいものがあつた。そのためイスラエルへ来た者で再移住する人もいた。

しかし、イスラエルの方向性を決めたのは、第2アリヤの人々であつた。イスラエルは1970年代前半まで社会主義シオニズムが支配的な国柄であつたが、その基礎となる理論の思想家たちが、前出のナフマン・シルキンであり、ベル・ボロチョフ（1881～1917）であり、アハロン・ダビッド・ゴルドン（1856～1922）であつた。

先に紹介したブントは、革命によってユダヤ人問題が解決すると信

じた。しかしそう考えなかつたのが、社会主義とシオニズムを組み合わせたいわゆる社会主義シオニストである。ディアスポラのユダヤ人は、農業、近代工業その他の基幹的経済活動から排除され、生産的労働に関わっていない。その職業構造はいびつで不健康である。さらにまた、特に東欧の社会主義運動に見られる露骨な反ユダヤの空気も悲観材料であつた。

いびつな構造を是正するために社会主義シオニストの考えたのが、2つの原則である。第1が労働の克服（Kibbush ha-avodah）、第2が進取の開拓精神（Halutziiyut）。ユダヤ人自身が社会の機能上必要な経済をすべて遂行し、いかに危険で困難な仕事、不慣れな労働であっても、新しい社会の建設に必要ななら、自ら進んで引き受ける。第1アリヤの人々は、アラブ人を雇用したが、第2アリヤの移住者はこれに反対した。肉体労働者に変容することが、ユダヤ民族の

社会的民族的革命の一環であり、自立したユダヤ人社会の経済を築き上げるための前提、と考えたのである。

この2つを象徴するのがゴルドンであつた。本人は名前で呼ばれることは滅多になく、名前の頭文字をとって、ヘブライ語でアレフ・ダレットの通称で知られた。ロシアのポドリア出身、学校の事務員であつたが、50歳近くになって移住し、一介の農業労働者として生きた人物である。ユダヤ民族の救済は、社会秩序の再編成よりは個々人が自分を変えることで実現する。その大元が肉体労働である。労働を通して自然にもどることが、宗教の再発見につながり、宇宙との一体感を取り戻すとも言つたので、ゴルドンを評して労働教の開祖とからかう人もいるが、ユダヤ人の労働倫理と労働運動に大きい影響を与えたことは間違いない。1960年代、70年代にイスラエルを訪れた日本人で、乾燥地の炎熱下で黙々として働くイスラエルの青年たちに感動する人が多かつた。この労働倫理はゴルドン時代に築かれたのである。



ゴルドン



モンタギュ